

情緒状態と「動き」の投影（2）

—不快感の質的違いについて—

門 前 豊志子

目 的

異なる情緒状態における動きの投影のメカニズムを明らかにしていく試みの一環として、今回は、不快状態における動きの投影の特徴を調べると共に、不快感の質に差異があるか否かを調べることを目的とする。単に不快な感情といっても、その感情のニュアンスは、様々であることが考えられる。発達のにも、個々人の経験や感覚の違いによっても、不快と感じる感じ方には差異があることが予測される。すでに門前（1983）は、図形に投影されたイメージ内容の分析から、不快な感情に、質的違いがあることを示唆された。具体的には、重い感じ、暗い感じ、何かすっきりしないもやもやした感じなどが生じやすいことである。そのときの実験では、イメージの内容について焦点を当てたので、不快感それ自体については、詳しく分析されていない。したがって、今回は、不快感に質的違いがあるのかないのかを再度明確にし、もし、質的違いがあるとすれば、それはどのような性質を備えているのかということと、不快感の質的ちがいが、実験的に設定された音刺激のテンポの遅速によって、どのような影響を受けているのかということ、さらに、その結果、動きの投影にどのような影響を与えているのかということを明らかにしていきたい。

仮 定

不快な情緒状態にあっても、不快刺激を実験的に設定する音刺激のテンポの

遅速によって、不快感の質がことなるであろう。そして、その不快感の違いは、動きの投影にも影響を与えるであろう。

方 法

被験者 女子短大生 32名

平均年齢 19.5歳

実験計画 被験者を無作為に二群に分け、実験的に不快な状況を設定した。実験計画表に示す通りである(表1)。

まず実験1群として、不快な音刺激のテンポが遅い条件(UC40群と以下略記する)のもとで実験が試行される群。

つぎに実験2群として、不快な音刺激のテンポが速い条件(UC120群と以下略記する)のもとで実験が試行される群。

音刺激を構成する不協和音は、実験二群とも同一であるが、テンポに遅速があると、全体として受ける不快な印象は、異なって感じられる(図1)。

表1. 実験計画

群	被験者数	情緒状態	音刺激	図形刺激
UC40 群	14名	不快	♩=40の テンポ (ゆっくり)	15枚の 灰色系列
UC120 群	18名	不快	♩=120 のテンポ (はやい)	15枚の 灰色系列

図形刺激 15枚の簡単な幾何図形からなる。

図形の系列として、灰色図形と白色図形からなる灰色系列と、図形の形態は灰色系列と同一であるが、灰色の図形が黒色にかわっている黒色系列の二系列があるが、今回の実験では、灰色系列を用いている(図2)。

実験手続き 実験二群とも、室内後方、左右のスピーカーより、適度な音量で実験中不快刺激が流される。したがって、被験者は実験的に設定された不快な情緒状態の中に入れられ、不快感を外から与えられることになる。

室内前方中央スクリーンに、スライドで15枚の図形刺激が、一枚につき5秒間提示される。一枚提示された後、10秒間で、先刻提示された図形について、動きの投影を、動きの程度、速さ、方向性という三つの側面からとらえて、それぞれ記録用紙に記載することが要求される。15枚が終了するまで、連続して行われ、その間、情緒刺激はずっと継続されて流されている。

また、実験中の意識状態については、質問紙で19項目を設定し、実験の前後に評定させた。



図1. 不協和音 (A) と不協和音 (B) を示すが今回はBのみを使用

図形番号	1	2	3	4	5	6	7	
図形	▲	◎	●●●	●●●●	⬡	◇	◇	
図形番号	8	9	10	11	12	13	14	15
図形	■	⊙	⬢	□	⬥	△	●	◑

図2. 図形刺激 (黒色系列と灰色系列があるが今回は灰色系列を使用)

動きの投影の尺度 動きの投影を測定する尺度としては、動きの程度、動きの速さ、動きの方向性という三つの側面からとらえた。動きの程度は、動きがないと動きがあるの二つに分けられ、動きがあると感じた被験者は、すこし-1、まあまあ-2、かなり-3、非常に-4という4段階のいずれかを評定するよういわれた。動きの速さについては、動きがあると感じた被験者のみが、動きの速さが、遅い-1、ふつう-2、はやい-3、という3段階のいずれかを評定するよういわれた。

動きの方向性についても、動きの速さと同様、動いている感じを持った被験者のみが、その動いている方向がどのような方向を示しているかを矢印で図示するよういわれた。

情緒の意識状態 実験を試行する前に、そのときの意識状態を質問紙の項目に応じて5段階尺度で評定させ、実験終了後に再び同じ項目を同様に評定させ、前後の差を調べた。

結 果

以上の方法で調べた結果は、図3、図4、図5、表2に示されるとうりである。図3に示されるように、動きの程度における二群間の差の検定の結果、 $T=2.93$ で、両群間に1%水準で有意差が認められた。両群間の特徴が認められた図形は、図3、図7、図12、図13の図形であった。

動きの速さについては、図4で示されるように、二群間での差については、有意差が認められなかったが、10%水準で有意な傾向が認められた。速さについては、両群間で顕著な差が認められなかったが、図形7は、それらのなかで唯一差が認められた図形であることがこの結果から読み取れる。動きの方向性については、同一方向を示す頻度の高いものをとりあげ、比較検討した結果が表2に示されている。頻度としては、同一方向3（度数）以上を示した方向性についてとりあげた。両群間で顕著な差を示した図形は、図4、図6、図7、図8、図11、図12の6図形であった。

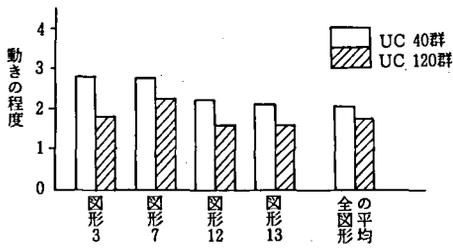


図3 動きの程度の平均と両群間で有意差を示した図形別比較

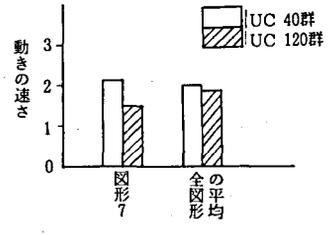


図4 動きの速さの平均と両群間で有意な傾向を示した図形7の比較

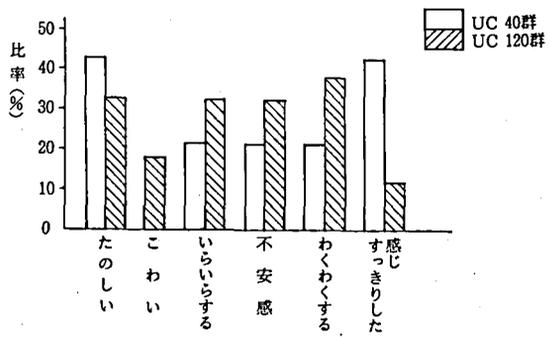


図5 両群間で有意差を示した意識状態の比較

図5 両群間で有意差を示した意識状態の比較

表2. 両群間で有意差を示した動きの方向性の図形別比較

群	図形 4 *	図形 6	図形 7	図形 8 *	図形 11	図形 12 *
UC40群	拡散	回転	下降	拡散	拡散他	上昇
UC120群	収縮	上昇収縮	上昇	せまる	上昇	収縮

* は灰色の図形である。

両群間の意識状態の差を示したのが、図5である。X²検定10%水準で有意差が生じたのは、たのしい、こわい、いらいら、ふあん、わくわく、さびしい、なにかちがう気分の7項目であり、1%水準で有意差が生じたのは、すっきりした気分という1項目である (X²=4.23, p<.01)。

考 察

以上の結果から考察を試みる。

考察の中心を、仮定で考えた次の二点に絞る。まず第一として、本実験の焦点としている不快感に違いがあるとすれば、実験二群間でどのように生じているかということである。第二としては、不快感の違いが実験二群間に認められたとすれば、それらが動きの投影にどのように影響しているかということを検討してみることである。

1. 不快感に質の違いが認められるか否かについて

まず、図5の結果から検討してみる。UC40群では、不快な感じであるが、すっきりとした気分が非常に強く、また、楽しい気分も感じていることがわかる。恐い、いらいら感、わくわくした気分や、不安な、寂しい感じが少ないことが判る。とくに、恐いという感じは、まったく認められなかった。それに対して、UC120群では、すっきりした気分が非常に少なく、いらいらした感じ、不安な、わくわくした、恐いといった感情が喚起されている。これらの違いを見てみると、一つには、音刺激のテンポの遅速が、感情の質の違いに大きな影響を与えていることが考えられる。しかも、気分が不快な状態におかれた上に、図形刺激を見せられることによって、不快な感じが一層強化されたり、変化していったりするのではないかと推測される。このように不快な感じといちがいにも、いろいろな感じ方をひきおこすことが明らかになってきた。UC40群では、不快な感じながらも、気分のすっきりした安定感が生じてきて、むしろそのなかに浸れる楽しさを享受しているとすら考えられる。UC120群では、

すっきりしない感じが非常に強く認められ、いらいらした気分になるか、逆に、わくわくした気分の昂揚を感じるか、漠然とした不安感を抱くか、明らかに恐いという恐怖心を抱くかといった、複雑で多様な性質をもった不快な感じを経験していることが判る。そこにすっきりしない感じと、すっきりした感じの違いが両群間で生じてきているのではないかと思われる。図形刺激との関係では、それぞれの感じがどの図形刺激と対応して生じてきているかということ进行分析することができなかったため、個々の図形刺激との対応性については、不明確のままであるが、図形の方向性をはじめ、動きの投影の特徴を両群間で比較検討してみると、図形刺激が不快感に及ぼす影響が、ある程度捉えられるのではないかと考えられた。

2. 動きの中に投影された不快感の違い

① 不快感の違いと動きの方向性

表2の結果から、両群間に有意な差が認められた動きの方向性の特徴は、UC40群が、上昇方向と拡散的方向を主とするのに対して、UC120群では、収縮方向と前に突出して迫ってくる動きの方向、および斜め左上への上昇方向が主となっていることである。図形の形態としては、等辺四辺形、不等辺四辺形、五角形および円形の集まりになった図形に両群間の動きの方向性の特徴が顕著に認められた。図4、図8、図12は、灰色図形であり、図形7は、不等辺四辺形であり、図形6は、等辺四辺形であるが、真ん中に対角線がはいっている形態の特徴を有している図形である。図形4は、図形の構造としても、回転する動きを喚起し易い図形である。げんに、同一の形態を有しているが白色である図形9では、両群とも回転する動きの投影を示している。ところが灰色の色彩を有する図形4では、回転する動きとはまったく逆方向の動きの方向性を示していることに注目させられる。気持の不安定なたかぶりを抑制するような動きの投影のされ方がうかがえる。図形の形態だけではなく、色彩も不安感に拍車をかけて、いらいら感や、わくわく感を強化させているように思われる。同様の

傾向が、図形 8, 12にも認められることから、UC120群では、図形の形態と色彩の両方が不快感を強化し、不快感を処理する方法として、抑制するような動きの方向性がとられたものと解される。しかも、図形12では、UC40群が、上昇方向に対して、UC120群が、収縮方向を示している点などを考えると、単純に、逆方向を示しているとは断定できにくい面があるが、図形の構造や、形態、色彩が不快感の有り様に質的違いをひきおこさせ、それが方向性の違いに現れてきているのではないかと考えられる。個々の図形別に意識状態が記録されていないので、どのような不快感の違いを意識したかは正確に把握することはできなかったが、すくなくとも、UC120群にとって、灰色の図形刺激は、不安感、いらいら感を増大し、それを抑えようとする動きが強いことを示唆していると考えられる。

つぎに、白色図形に示された両群の特徴をみてみる。図形 6 では、回転する動きに対して、上昇か、収縮かの二方向を示している。UC40群では、不快な中にも、なにか楽しい気分を味わっている様子がうかがえるが、UC120群では、楽しさよりも、もっと強いわくわく感を抱いてわくわく気分を上昇方向で発散させていこうとするタイプと、不安やいらいら感を感じて、それらを収縮方向で抑えていこうとするタイプとに分かれているのが特徴的である。図形 7 は、図形の構造自体不安定で、不安感を刺激する性質を有していると考えられるが、UC40群では、不安感をそのまますんなり投影でき、外的刺激と、内的不快感との間に不一致がなく、むしろすっかりとした状態で不快な感じを受け容れているように感じられる。その結果が、方向としては、下降方向を示しているように思われる。それに対して、UC120群では、両者の一致を受け容れるには、余りに不快感が強くなりすぎ、場合によっては、恐怖感をも感じてしまうために、上昇方向を投影することによって、必死でそれらの感情を振り払おうとしたり、それらの感情から、逃れようとする試みがなされているように推測される。図形11は、正方形での図形であるが、ここでもUC40群は、不快ななかでも自由な感情の投影を示して楽しんでいるが、UC120群では、四角い枠にはめ

られたような、なにか逃げ場のない不安や緊張感を感じ、そこからの解放を求めると、上昇方向をとっているように解される。

以上見てきたように、両群における不快感の質的違いが、図形刺激の特徴の影響を受けながら、方向性の違いに明確に現れてきていることが判った。UC40群では、不快感を受け入れ、不快ななかで、楽しみを感じたり、不快感と一体化した行動をとることによって、非常にすっきりした感覚を経験していることが明らかになった。

UC120群では、不快感が強くなって恐怖心を喚起させられる場合には、それに対抗する方向をとることによって、恐怖心を克服しようとする傾向がみられたり、また、いらいら感や、わくわくした感じが強くなってくる場合も、それらの感情を楽しんだり、受け入れていくというよりは、それらの感情を抑えることによって、不快感を解消しようとする処理の仕方が方向性に投影されていることが明らかとなった。

② 不快感の違いと動きの程度

両群間で不快感の違いが動きの方向性の差異となって投影されることを既に確かめることができた。ここでは、動きの程度との関係において、どのような特徴が見られるかを検討する。図3に示されるように、動きの程度は、全体として、UC40群の方が、UC120群よりは、動いている感じを多く持っていることが認められた。動きの程度に関して、音刺激のテンポが速い場合の方が、動いている感じを強くもつのではないかと予想されたが、実際には、音刺激のテンポが遅い方が動いている感じを多く持つという逆の現象となり、動いていると感じる感じ方は、メトロノームで測定される機械的な、物理的な速度ではなく、動いているという感情移入がしやすい動きの程度があるのではないかと考えさせられた。たしかに、日常生活においても、飛行機の速さや、新幹線のスピード感を経験しても、動いている感じを強く持つとは限らない。むしろ、鈍行で旅をしたり、池でボートを漕いだりしている方が、動きを感じるということがある。速いテンポで不快な情緒を喚起させられる場合には、外の刺激に対

して、動いているかいないかを感じて、動きを投影する以前に、内的な不快感を処理する方が先決となるように考えられる。不快な感じを不快なままに味わって、その感情にひたれるのは、ゆっくりしたテンポの刺激状況に置かれなないと無理なことが判る。

次に、動きの程度と図形別特性との関係を詳しく検討してみる。二群間で有意差を示した図形は、図3、図7、図12、図13の四図形である。図形3は、図形の構造上明らかに動きを感じ易い構造を示しているが、UC120群では、動きを感じる程度は、低くなっている。図形7は、これまでの実験から不快感を喚起する構造を有する図形であることが判明しているが、この図形に対しても、同様に動きを感じる程度が低い。図形13は、安定した形態ではあるが、円形よりは、不安定な構造的特徴を持つ図形として位置づけられる白色三角形である。円形のように安定した図形の形態になってしまうと、動いている感じを感じさせる余裕が生じてくるのかもしれないが、明らかに不安定な図形や、やや不安定な構造を有している図形では、不快感が強化され動きを感じる感じ方が抑制されるのではないかと思われる。それに対して、UC40群は、不安定感や動いている感じが強化されてもその感じを受け入れ、楽しむように不安定感と一体化できることを示唆している。したがって、ここでも動きを感じる程度は、音刺激のテンポが速いから動きを多く感じるのではなく、テンポの遅速によって、不快感が量的に増大して不快感の程度が強くなるのではなく、不快感の質が変化して、不快感それ自体の性質が異なるために、動きを感じながらも、動きを感じていないと抑制することによって、不快感を処理する働きと、他方動きを感じて動きのなかで不快感を発散し、開放してゆく処理の仕方がとられることが認められたと結論づけられる。

③ 動きの速さと不快感の関係について

これまでの実験では、動きの程度と動きの速さとの関係では、相補関係といえる関係が確認されている(門前, 1982)。また、門前(1988)の実験では、快・不快の情緒状態が、ゆっくりしたテンポの音刺激によって、惹起されると

きには、動きの量的側面と、動きの質的側面の二元的側面として捉えられるが、快・不快の情緒の状態が速いテンポの音刺激によって、惹起される場合には、二元的な関係として作用せず、一元的に、量・質が共に一体となって変化していくのではないかとすることが示唆された。これらのことを考慮しながら、今回の結果を見てみると、不快感だけの実験状況の分析は、今回が初めてであるので、これまで認められた相補関係がここでもまた認められるか否か、質・量の側面がどのようになって変化しているかについて検討してみる。

動きの速さに関しては、図4の結果で判るように、有意な差が両群間で認められなかったこと、また、図形の7のみが両群間で有意な傾向にあることを考えると、動きの程度と動きの速さとの関係は、相補的關係で変化しているというよりも、動きの速さと動きの程度とが正比例的関係で変化しているといえよう。不快状態と図形刺激との関係という二点からとらえると、動きの速さの早いUC120群では、動いている感じの速さが、抑制され、直接には投影されにくいことが明らかであるし、動きの速さの遅いUC40群では、ゆっくりとしたかんじがそのまま直接動きの速さとなって投影され易いことも明らかになった。

したがって、不快感という同一の状態であっても、音刺激の遅速によって、動きの速さに対しても、異なる投影の仕方がなされていることが明確になった。UC40群では、不快群でありながら、不快な感じを抑制するのではなく、不快な感情に浸りながら、不快感を楽しむことができる状態と考えて差し支えないように思われる。図形7のように不快感が強くなると、実際の音刺激のテンポよりも速く動いている感じを投影することによって、不快な状態からの開放を促しているものと推察される。この図形では、動きの速さと図形刺激および情緒状態との間に相補的關係ともいえる関係をかいま見ることができる。

3. 不快感の違いの投影的特徴について

不快な状態に置かれた二群の投影的特徴を検討してみる。

すでにみてきたように、不快な中にもなにかすっきりとした気分で、しかも

楽しい気分すら感じられるUC40群では、動きの程度、動きの速さ、動きの方向性とも図形刺激が不快感を強化しない限り、情緒状態をそのまま動きの中に投影する傾向（比例的関係）にあることが明白となった。図形刺激特性では、不等辺四辺形に対してのみ、動きの程度、速さと動きの方向性との関係が相補的な関係で対処されていることが判った。

上記の特徴に対して、UC120群では、動きの速さの音刺激が早く、しかもいらいらした感じや不安な感じ、また、場合によっては、わくわくした感じを抱いたのにも関わらず、動いている感じが強く抑制され、動きの程度、動きの速さ共に動きを抑制する投影の仕方が顕著であった。動きの方向性に関しては、抑制する方向と、開放する方向の二方向の特徴がみられた。動きの程度、速さと動きの方向性が抑制的に働いて、不快感が今以上に増大するのを抑える様な処理の仕方をしている図形の特性は、灰色図形であることが判った。白色図形に関しては、動きの程度と速さ、動きの方向性とは、相補的關係にあるようで、速さと動きの程度を抑制すると、逆に方向性で発散する関係にあることがわかった。また、UC40群が不等辺四辺形という図形の不安定な構造に対して、不快感を増強させられたのに比して、UC120群では、図形の色彩が不快感を増強させ易く、構造的特性に関しては、不快な感じをそのまま受け入れながら、発散する方向で解消してゆく動きの投影が顕著であることが判明し、両群間の動きの投影の仕方に差異が認められたといえる。

4. ま と め

本実験では、不快な情緒状態における不快感に質的な差が感じられているのか否かについて、実験的に二群を設定し、不快感の違いについて意識的に把握することを目的の一つとした。さらに、不快感に違いが生じたとすれば、それらが動きの投影にどのような影響や特徴を与えているかを検討することを目的の第二とした。

実験の結果では、仮定で考えたように、不快感に質的相違があることが判明

した。ゆっくりした音刺激による不快状態では、不快感それ自体を受け入れ、その中で楽しむことが可能であったが、速いテンポの音刺激による不快状態では、いらいら感や、不安感、ときには、恐怖感が想起され、不快感を受け容れるのではなく、抑える働きが認められた。これら不快感の対処の仕方が、動きに投影されていると考えられた。すなわち、ゆったりした不快状態では、動きの速さ、程度、方向性の三者の関係は、情緒状態をそのまま投影していると考えられる一体的な動きの投影のされ方（比例的関係）が特徴的であった。それに対して、いらいらした、不安な不快状態では、動きの速さ、程度、方向性すべてが、抑制される場合と、動きの速さと、程度が抑制され、方向性は逆に開放されるような相補関係ともいえる関係で対処される場合があることが示唆された。門前（1988）の検討課題としていた、情緒状態と動きの量的側面と質的側面との二元性については、不快感の質的違いによって、動きの量的側面と質的側面とが一元的に作用する場合があることが確認された。

図形の刺激特性との関係については、今回は十分検討を試みておらず、次回に分析したいと考えているが、不快と感じたり、不快感が強化させられる図形の特性に不快な状態の質的違いが関与していることが伺えた。

引用文献

- 門前 豊志子 1982 情緒的快・不快が投影的運動知覚に及ぼす影響
心理学研究 第53巻, 第5号, 266-273.
- 門前 豊志子 1983 彩色・無彩色図形におけるイメージの投影について
信州豊南女子短期大学紀要 第1号, 55-72.
- 門前 豊志子 1988 情緒状態と「動き」の投影 — 異なるテンポによる音
刺激が動きの程度と速さに与える影響 — 信州豊南女子短期大学紀要 第
5号, 113-129.